

2009年9月9日

## 教会と私

中内恒夫

私は今年の10月には78歳になります。改めて教会と私について書こうとすると、いつの間にか私も人生の最終段階に至ったと痛感します。私は東中野教会はいわば編入生のようなもので、戦時中疎開していた高知で中学4年の時に土佐教会の大山寛先生から洗礼を受け、その後1950年に一橋大学に入学して上京し、最初にかよった教会は上原教会でした。当時の社会で大きく話題を呼んだ赤岩栄牧師の教会です。そこには作家の椎名麟三氏がおられました。

一橋基督教青年会寮に入寮を許された私どもは、赤岩牧師や浅野順一、渡辺善太等の先生をお招きして聖書研究会を続けました。一橋の教授がたま時々参加してくださり、久武雅夫、高島善哉などの教授たちと牧師先生を交えて時にはたき火を囲んで語り合ったことが忘れられません。

ICU にその頃招聘教授で来日しておられたエミール・ブルンナー先生を私ども学生でお願いして全学生で兼松講堂が立錐の余地のないくらいあふれる講演会とそれに続いて談話会に昂揚感を味わったこともありました。

青年期の精神は極めてダイナミックです。私も寮生活を通じて精神の遍歴をいたしました。が、やがて赤岩牧師のマルクスの領域にはついていけなくなりました。しかし、キルケゴールに関して深い影響を受け、これは今日にも続いております。「君はゲーテ的なところが素晴らしいが、いつかひっくり返りはしないかと心配だ」と赤岩牧師から言われました。私は古典的なものを求める気持ちが強かったので、当時のゼミの教授であった久武雅夫先生の感化もあって、由木康先生の東中野教会に通い始め、やがて教会員にさせていただき、結婚式の司式も由木先生をお願いいたしました。

パスカルと音楽と文学的素養と都会的洗練さなど、由木先生から北村、織田先生に続く東中野教会の個人的自由に寛容な雰囲気は私はいつも有り難く思っております。加齢とともに私の礼拝出席率は低下の一途をたどっておりますが、この点はまことに恥ずかしく思っております。

さて、エミール・ブルンナー先生に一橋に講演に来ていただいたとき、帰りの車の中でお話を伺う機会がありました。「パウロは最初の実存主義者だった。」と言われたのが耳に残っております。若い日に得たこういう体験がいま思いますと私に大きな影響を与えております。

私は目下、気ままな定年生活をしておりますが、ICU の後しばらく東洋英和にありました折、浜辺達男牧師のお計らいで15回ほど講話をいたしました。1つの話のために2ヶ月ほど準備しますので、計30か月は専門の経済を忘れて精神的に充実した時間を過ごす

ことができたわけです。小さなことでも自分で探ったり努めてみたりすると素晴らしい時間のなかに没入できます。定年生活は何といても時間的に自由ですから、散歩や旧友との交友の頻度が増え、人情の温かさから受ける喜びも大きくなります。

散歩的日常と良く重なるのはヨハネ伝の文学的・人格的叙述です。私は神学的訓練は皆無ですから独断が多いと思いますが、ミサ曲と重ねてイエスの一生を想い、キルケゴールを読むと、同じことを何百回聞いても不思議な感動を新たに覚えます。

4年半前に妻を失い、孤独な自炊生活を続けておりますが、土佐教会の受洗以来ここ50年は東中野教会で落ちこぼれの出席率を嘆く身ではありますが、椎名麟三氏を突き抜けて、遠藤周作氏の復活の世界が慰めを与えてくれます。若き日の受洗の種が老年の孤独を大きな喜びに変えてくれるとは予想もしないことでした。毎日亡妻の遺影にお茶を供え、ミサ曲を少し聴くのは自分のためでもあります。芸大の学理科関係の人たちが時々大勢で来てくれるのも至福の時です。

鎌倉まで行ってみようと思われる方があれば未熟老人の私は大歓迎をいたします。